

日欧の大学と職業 : 高等教育と職業に関する12カ国比較調査結果

吉本, 圭一
九州大学助教授

<https://hdl.handle.net/2324/18888>

出版情報 : 日欧の大学と職業 : 高等教育と職業に関する12カ国比較調査結果, pp.1-40, 2001-03-30. 日本労働研究機構
バージョン :
権利関係 :

第1章 調査結果の概要

1. 基本的な3つの課題

本章では、日欧比較調査の結果についての次章以下での個別テーマごとの詳細な分析に先だって、基本的な結果の概要を示すことにするが、ここでは①高等教育経験、②職業への移行とキャリア、③職業的な能力と大学知識という3つのテーマ、基本的課題に沿って結果をみていくことにしたい。すなわち、本調査研究の基本的課題を、あらためて設定・確認しておきたい。

① 高等教育経験の多様性、特に就業体験との関連で

欧州における高等教育の大衆化は、欧州大陸諸国の伝統である学生の多様性と大学間の移動、とくに学生の年齢構成や学習・就業経験に関わる多様化を、一段と推し進めているのではないか。他方、日本において、ユニバーサル段階の指標ともいべき社会人など年齢や経験面での学生層の多様化は遅々として進展していないことが指摘されている（吉本1999a）。

こうした学生層の差異は既存統計資料からは十分に解明されえないところであり、国際的比較調査の観点から大卒者の経験の特質をより明確に把握することができる。特に、職業的な準備教育、高等教育改革にそれぞれどのような課題を投げかけるものであるのか。また欧州における高等教育在学中の多様な体験は、大学が大衆化の課題に応じた教育活動に向けて組織的に準備している性格のものであるのか、それとも、個々の学生が高等教育段階での学習を自由に選択できるシステムを通して結果的に広がっているものであるのか。日本において、大学外での学習経験や就業経験を、いかに大学での教育活動と連動・接続させていくかという今後の課題に答えていくために、こうした観点での比較検討を行いたい。

② 職業への移行の円滑さと支援システム、初期キャリア

戦後日本においては、官公庁だけでなく民間企業においても、広範に新規学卒定期一括採用の慣行が成立しており、このため、とくに私立大学を中心として大学を通しての組織的な就職のためのガイダンス等の支援が編成され、展開されてきた。しかし、1990年代のバブル経済とその崩壊の過程を通して、新規大卒労働市場がゆらぎ、大学組織のガイダンスの役割もまた徐々に変わりつつあるように見える。

とくに、1998年の就職協定の廃止はこうした揺らぎの結果でもあり、またさらなる揺らぎの震源とも考えられる。こうした環境のもとでインターンシップなどの体験的学習要素が重視されつ

つあり、大学のガイダンス機能の新たな方向での充実が求められている。

これに対して、欧州においては、日本のような学卒者の就職に関わる制度的慣行を広範にみることはできないけれども、エリート型の古典的の大学と専門職労働市場が対応しつつ、大学外の高等教育機関が技術的職業にかかわる変動する労働需要に対応するという図式がながらく通用してきたと見られる。しかし、今日では、新たに創設された非大学型高等教育機関がその実社会対応性の面から次第に魅力を高めていき、大学・非大学間の伝統的な機能的分担が崩れて行きつつあるのではないか。こうした過程で、古典的な大学においても、学生の就職指導などを含めたガイダンス活動の充実が課題として認識されるようになってきた。欧州内でも、学生層の特質と関連してガイダンス機能の整備の実態には大きな差異が見られる。

大学卒業者がどのような面で各大学のガイダンス機能を活用しているのかを、日欧で比較検討することとしたい。

③ 大学知識と職業的な能力

大学で身につけた知識技術は、職業生活においてどのような有効性をもつのであろうか。

このことは、「就職－失業」といった問題とは異なる視角から、大学教育の効用を問うものである。日本では、大卒者の就職時の選択と企業における採用選抜の双方において、大学で学んだ専門性の領域やそこでの到達度があまり考慮されないということが、社会一般に広く信じられてきた。他方、欧州において信じられてきたことは、高等教育機関で学習する専門的な領域とその達成度が専門的職業への参入の不可欠の条件であり、また十分条件であるというものである。

こうしたそれぞれの見方は、高等教育の大衆化・ユニバーサル化という新たな段階で生じてきた大学知識と職業的能力の対応に関する課題を前に、ごく一面的であることが次第に認識されつつある。日本においても、「課題探求能力」などの提言に込められているように、大学の専門的な教育の充実が社会から期待され、大学も対応していこうとしている。欧州でも、狭い範囲の専門性が技術革新の早い時代に必ずしも対応しないため、より潜在的なあるいは総合的な能力の形成が求められ、それらが職業能力（コンペテンシー）をめぐる活発な議論につながっているとみることができよう。

すなわち、大学知識と職業的な能力の対応性に関する、社会の期待・見方が、日欧で、むしろ次第に共通の焦点化の方向を辿っているのではないだろうか。大卒者が大学知識の有用性をどう認識し、どのように活用しているのか、またどんな必要を感じているのか、これからの知識社会・学習社会の課題にどのように対応しようとしているのか、調査結果を検討したい。

2. 高等教育入学までの経験と高等教育経験

1) 欧州での高等教育入学・卒業年齢の多様性

序章のサンプルプロフィールですでに紹介・指摘しているとおり、日本では若年期の短期間で高等教育経験を終了しており、その点の標準的な学生プロフィールにおいても欧州と対照的である。つまり、日本では、多くが、18～19歳で入学し、4年間（医・歯系は6年）の標準的な修学年数で卒業するパターンをたどっており、卒業時年齢は平均で23.4歳である。

これに対して、欧州各国では、日本よりも入学・卒業における年齢の多様性が大きい。1995年卒業者の卒業時平均年齢は20代後半の国が多く、また英国のように、10代の高卒進学者と20代後半の成人学生という異なるタイプの学生層を含み個人差が大きい国や、イタリア、オーストリアなどのように平均的に在学年数が7年に達している国などがある。

2) 欧州における入学までの多様な経験

高校卒業などの大学入学資格取得後に大学入学する前までの活動経験をみると、表1-1の通り、日本の場合、主に高校卒業（大学入学の基礎資格取得）後の活動としては、予備校在学経験とアルバイトである。それぞれが、欧州側カテゴリーの「教育訓練」あるいは「就業体験」に含まれらう

表1-1 入学前の活動経験

| | | 大学受験のための予備校等(含む通信)に在 | 職業訓練のための専門学校(専門学校を除く)に | 雇用された、または自営で働いた | アルバイトをした | 仕事をさがした(失業を経験した) | 子育てや家事に専念した | 兵役についた | その他(ボランティアなど) | どれも経験していない | 対象者数(無回答含む) |
|----|----|----------------------|------------------------|-----------------|----------|------------------|-------------|--------|---------------|------------|-------------|
| 日本 | 男性 | 39.3 | 0.2 | 1.4 | 22.8 | 0.4 | 0.0 | | 1.3 | 42.8 | 1,808 |
| | 女性 | 20.8 | 0.0 | 0.4 | 19.4 | 0.2 | 0.2 | | 1.4 | 60.4 | 1,613 |
| 合計 | 男性 | 9.6 | | 30.2 | | 6.6 | 0.6 | 24.8 | 11.2 | 45.2 | 12,921 |
| | 女性 | 13.1 | | 30.9 | | 5.4 | 4.3 | 0.5 | 14.4 | 49.6 | 15,301 |
| IT | 男性 | 5.0 | | 16.9 | | 3.5 | 0.6 | 5.8 | 9.6 | 65.9 | 1,453 |
| | 女性 | 4.4 | | 12.4 | | 5.2 | 3.6 | 0.1 | 9.9 | 69.3 | 1,649 |
| ES | 男性 | 9.6 | | 30.2 | | 6.6 | 0.6 | 24.8 | 11.2 | 45.2 | 12,921 |
| | 女性 | 13.1 | | 30.9 | | 5.4 | 4.3 | 0.5 | 14.4 | 49.6 | 15,301 |
| FR | 男性 | 5.0 | | 16.9 | | 3.5 | 0.6 | 5.8 | 9.6 | 65.9 | 1,453 |
| | 女性 | 4.4 | | 12.4 | | 5.2 | 3.6 | 0.1 | 9.9 | 69.3 | 1,649 |
| AT | 男性 | 3.7 | | 37.1 | | 19.9 | 0.4 | 37.8 | 22.4 | 14.9 | 1,204 |
| | 女性 | 6.7 | | 33.3 | | 17.2 | 3.5 | 0.5 | 32.3 | 23.2 | 1,102 |
| DE | 男性 | 22.4 | | 37.0 | | 12.8 | 0.7 | 64.0 | 17.6 | 3.7 | 2,108 |
| | 女性 | 24.7 | | 40.3 | | 16.5 | 3.1 | 3.4 | 34.9 | 10.8 | 1,572 |
| NL | 男性 | 9.1 | | 37.3 | | 3.0 | 0.3 | 6.0 | 18.5 | 40.1 | 1,382 |
| | 女性 | 12.4 | | 37.6 | | 1.8 | 2.1 | 0.1 | 24.3 | 36.5 | 1,737 |
| UK | 男性 | 1.0 | | 4.1 | | 0.5 | | | 0.5 | 94.6 | 1,342 |
| | 女性 | 1.4 | | 3.8 | | 0.2 | 0.2 | | 0.6 | 94.9 | 1,963 |
| NO | 男性 | 18.6 | | 53.2 | | 6.9 | 1.2 | 40.8 | 12.2 | 18.2 | 1,442 |
| | 女性 | 29.8 | | 59.0 | | 3.6 | 11.5 | 0.2 | 13.4 | 17.1 | 2,082 |
| FI | 男性 | 11.4 | | 75.3 | | 12.1 | 1.3 | 54.8 | 14.9 | 9.4 | 1,046 |
| | 女性 | 25.2 | | 77.0 | | 10.0 | 8.4 | 0.4 | 20.1 | 12.6 | 1,615 |

注：欧州対象国はスウェーデン、チェコを除く

設問：大学進学資格取得後、大学・短大や専門学校などの高等教育機関に入学するまでの間に次のようなことを経験しましたか（斜線は各調査において設けなかった項目。また、EUは各項目に対する時間数を尋ねたため、経験なしに無回答まで含まれている）。

るのかどうか、多様な把握の方法があるだろうけれども、日本では欧州諸国と比較して、入学前の就業体験の少なさを読みとることができる。職業的体験のほとんどはアルバイトで、かつ2割前後である。もっとも、このことは欧州側で大学生の入学年齢の幅が広がっていることと関連しており、入学年齢が高い場合に、それに比例してそれまでに職業経験等を積んでいる可能性は高くなるはずである。

ともあれ、欧州では、就業経験を持つ割合が男女とも3割をこえており、教育訓練は1割強の経験率にとどまっている。また、兵役経験者も男性では4分の1に達しており、欧州では多様な背景を持った学生が入学してきていることがわかる。

入学前の海外経験についても、日本の場合、国際化の流れの中で、95年卒業者では「教育・訓練を受けた」者の割合が2.0%まで増えている¹⁾ものの、それでも欧州と比較して少ない(表1-2)。

表1-2 入学前の海外経験

| | | (複数回答、%) | | | 対象者数 (無回答含む) |
|----|----|----------|----------|-----------|-----------------|
| | | ある | 内訳(再掲) | | |
| | | | 外国で雇用された | 教育・訓練を受けた | |
| 日本 | | 2.3 | 0.1 | 2.3 | 3,421 |
| | 合計 | 11.2 | 5.4 | 6.3 | 27,493 |
| 欧州 | IT | 7.4 | 0.7 | 4.4 | 3,102 |
| | ES | 7.6 | 0.8 | 7.1 | 3,021 |
| | FR | 7.3 | 1.1 | 2.8 | 3,504 |
| | AT | 9.7 | 5.1 | 6.3 | 2,311 |
| | DE | 5.9 | 2.8 | 4.0 | 3,700 |
| | NL | 8.9 | 5.0 | 4.8 | 3,156 |
| | UK | 9.6 | 7.1 | 4.1 | 3,327 |
| | FI | 18.6 | 9.7 | 7.3 | 2,672 |
| | SE | 30.1 | 19.1 | 18.9 | 2,700 |

注: 欧州対象国は、ノルウェー、チェコを除く。

設問: 大学へ進学する前に、あなたは外国で勉強したり、雇用されたりしたことがありますか。

3) 日欧の高等教育における教育内容・方法における優先度と改革課題

表1-3から、大学での学習内容や方法に対する大学側の重視度をみると、日本において重視されている比率が高い項目は、「理論や概念の学習」「卒業論文・卒業研究の作成」などであった。

欧州で評価が高い項目としては、「理論や概念の学習」や「自学自習」があり、「現実の課題に即した学習」や「専攻分野や授業の自由な選択」についてはむしろ日本で評価が高い。つまり、欧州の高等教育機関では、日本以上にアカデミックな志向が強い点を指摘できる。

1) 九州大学の88-90卒業者調査によれば海外経験を持つ者は1%に満たない。

昨今の大学教育改革で焦点が当てられている課題である「コミュニケーション能力の取得」「在学中の就業体験」については、日欧ともに、これまであまり重視されてこなかったことがわかる。ただし、これはあくまでも卒業者の目から見た主観的でかつ相対的な評価であり、「就業体験」等の全体的な量については、後ほど触れるように、日本と比較して欧州ではるかに充実している。つまり、卒業者の「準拠枠組み」次第で評価は変わりうることに留意しておきたい。

表1-3 大学教育で重視されていたもの

| | 日本 | | 欧州 | |
|--------------------------|-------|----|--------|----|
| | 平均値 | 順位 | 平均値 | 順位 |
| b. 理論や概念の学習 | 3.87 | 1 | 4.04 | 1 |
| k. 卒業論文・卒業研究の作成 | 3.83 | 2 | 3.55 | 3 |
| e. 授業への出席 | 3.67 | 3 | 3.23 | 5 |
| g. 専攻分野や授業の自由な選択 | 3.57 | 4 | 3.07 | 7 |
| a. 事実や分析技法の習得 | 3.49 | 5 | 3.38 | 4 |
| d. 自学自習 | 3.18 | 6 | 3.64 | 2 |
| h. 現実の課題に即した学習 | 3.14 | 7 | 2.70 | 9 |
| l. 学習達成度の定期的なチェックと評価 | 3.04 | 8 | 2.51 | 10 |
| f. 必要な学習情報を得るための教員の積極的活用 | 2.90 | 9 | 3.13 | 6 |
| c. コミュニケーション能力の習得 | 2.73 | 10 | 2.77 | 8 |
| j. 課外で教員とコミュニケーションをもつこと | 2.49 | 11 | 2.30 | 11 |
| i. 在学中の就業体験 | 1.99 | 12 | 2.22 | 12 |
| 対象者数(無回答含む) | 3,421 | | 34,566 | |

注:欧州対象国はスウェーデンを除く。

設問:あなたが卒業された大学の学部・学科では、次のような内容や方法が重視されていましたか。(重視されている=5点 重視されていない=1点 とした5段階評価)

次に、大学の教育条件整備の現状、学習環境に対する評価を18の項目でたずねものが、表1-4である。表から明らかなおと、日欧ともにもっとも評価の高いのは「図書館の整備状況」であり、低いのは「研究プロジェクト参加」「大学運営への学生参加」「企業実習機会の提供」「教員との接触機会」である。日欧で、学生が大学内での「お客さんのような位置づけ」に対して必ずしも高く評価していないことを示している。

日欧の比較の観点でみると、日本では、「卒業論文・卒業研究への指導助言」の評価が評価の高い項目で第2位に入っており、これは欧州ではむしろ評価の低い項目となっている。他方、「学生同士が交流する機会や場」「授業方法の工夫」などについては欧州側の方が日本側よりも高いレベルの評価となっている

表 1-4 学習環境に対する評価

| | 日本 | | 欧州 | |
|------------------------|-------|----|--------|----|
| | 平均値 | 順位 | 平均値 | 順位 |
| p. 図書館の施設や蔵書の整備状況 | 3.68 | 1 | 3.40 | 3 |
| b. 卒業論文・卒業研究への指導・助言 | 3.67 | 2 | 3.04 | 10 |
| c. 専攻の授業内容 | 3.65 | 3 | 3.48 | 2 |
| n. 学生同士が交流する機会や場 | 3.39 | 4 | 3.96 | 1 |
| a. 勉学全般に関する指導体制 | 3.37 | 5 | 2.92 | 11 |
| g. 授業やコースを選択する自由 | 3.34 | 6 | 3.05 | 9 |
| q. 教材・テキストの整備 | 3.24 | 7 | 3.15 | 6 |
| d. 履修できる授業のバラエティー | 3.22 | 8 | 3.39 | 4 |
| e. 学部カリキュラムの体系的性 | 3.17 | 9 | 3.14 | 7 |
| f. 試験や成績評価の方法 | 3.08 | 10 | 3.09 | 8 |
| r. パソコンや各種測定機器などの整備状況 | 3.03 | 11 | 2.91 | 12 |
| h. 授業における実学性の重視 | 2.98 | 12 | 2.71 | 13 |
| k. 授業におけるアカデミックな内容の重視 | 2.91 | 13 | 2.52 | 15 |
| m. 授業以外で教員と接触する機会 | 2.79 | 14 | 2.60 | 14 |
| i. 授業方法の工夫 | 2.66 | 15 | 3.30 | 5 |
| l. 就職指導の組織や企業実習機会の提供 | 2.50 | 16 | 2.38 | 17 |
| o. 大学の意思決定に学生が関与できる可能性 | 2.38 | 17 | 2.49 | 16 |
| j. 研究プロジェクトに参加できる機会 | 2.34 | 18 | 2.32 | 18 |
| 対象者数 (無回答含む) | 3,421 | | 34,145 | |

注: 欧州対象国はスウェーデンを除く。

設問: あなたが卒業された大学の学部・学科では、勉学に必要な次の条件は整備されていますか。(非常に充実していた=5点 まったく充実していなかった=1点 とした5段階評価)

4) 欧州で多い、在学中の学習時間

高等教育機関での学習のもっともシンプルな指標は学習時間であろう。ただし、在学年数の違いや授業期間と休業期間の設定の違いなどを考慮する必要があり、結論するのは容易ではないが、表 1-5 では、学期中(授業開講期)の勉強時間は、日本では週平均27.2時間であるのに対して、欧州では36.6時間となっており、日本より3割以上学習時間が多い。授業期間外の学習時間も同様の傾向があり、日本の学生は欧州と比較して学習時間が少ないということになる。

表 1-5 学期中の平均勉強時間(総計)

| | 平均(単位:1週間) | | 対象者数(無回答含む) | |
|----|------------|-------|-------------|-------|
| | 平均 | 標準偏差 | | |
| 日本 | 30.2 | 12.67 | 3,421 | |
| 合計 | 33.7 | 14.92 | 28,335 | |
| 欧州 | IT | 35.7 | 17.86 | 3,102 |
| | ES | 41.0 | 14.64 | 3,021 |
| | FR | 36.2 | 14.44 | 3,487 |
| | AT | 28.7 | 14.94 | 2,311 |
| | DE | 34.5 | 12.34 | 3,700 |
| | NL | 31.7 | 14.03 | 3,156 |
| | UK | 31.5 | 13.45 | 3,327 |
| | NO | 32.7 | 14.01 | 3,559 |
| FI | 28.9 | 14.91 | 2,672 | |

注: 欧州対象国は、スウェーデン、チェコを除く。

設問: 大学在学中、あなたは平均して1週間に何時間くらい次のことをされましたか。

5) 在学中の就業体験・海外体験に大きな落差

在学中の就業経験をみると、表1-6のように、日本では学期中のアルバイトを含めた場合に授業期間中も休業期間中もそれぞれ8, 9割が経験しており、欧州では講義期間中の仕事経験は少なく授業期間中が4割、休業期間中でも5割にとどまっている。日本で、大卒者に「就業体験が不足している」というのは、このように時間的に見るかぎり欧州と比較して必ずしも当てはまらないことが確認できるであろう。

表1-6 在学中の就労等経験1 - アルバイト経験

| | 学期中 経験者 比率(%) | 週あたり | 標準偏差 | 学期中 以外経 験者比 率(%) | 週あたり | 標準偏差 | 対象者数 | |
|----|---------------------|-------------------|------|---------------------------|-------------------|------|--------|-------|
| | | 平均(単 位:時 間) | | | 平均(単 位:時 間) | | | |
| 日本 | 85.2 | 13.1 | 8.8 | 79.7 | 20.0 | 12.2 | 3,421 | |
| 計 | 41.0 | 12.5 | 9.9 | 54.7 | 25.4 | 13.2 | 28,344 | |
| 欧州 | IT | 32.3 | 14.1 | 11.8 | 28.2 | 19.0 | 3,102 | |
| | ES | 26.1 | 15.7 | 12.6 | 29.3 | 12.2 | 3,021 | |
| | FR | 22.6 | 15.1 | 11.1 | 44.0 | 31.5 | 11.8 | 3,496 |
| | AT | 47.0 | 14.5 | 10.8 | 57.2 | 24.8 | 12.8 | 2,311 |
| | DE | 53.4 | 9.9 | 6.7 | 65.9 | 22.6 | 12.7 | 3,700 |
| | NL | 63.6 | 11.0 | 8.8 | 67.3 | 19.2 | 12.5 | 3,156 |
| | UK | 34.8 | 14.6 | 9.8 | 62.9 | 30.1 | 10.8 | 3,327 |
| | NO | 47.6 | 10.4 | 7.5 | 68.2 | 28.3 | 12.3 | 3,559 |
| FI | 41.8 | 13.1 | 11.1 | 67.3 | 32.1 | 11.1 | 2,672 | |

注: 各項目に対して月数を回答。したがって、経験なしと無回答は識別不可能。

設問: 大学在学中、あなたは平均して1週間に何時間くらい次のことをされましたか。

しかし、大学を一時的に休むなどして行った就業体験や海外経験となると、日本では例外的であり、欧州ではそうした経験の方が一般的である。すなわち、欧州では、4割近くの大卒者が大学の専門に関連する就業経験をもっており、インターンシップ等の職業実習も3割を越えている(表1-7)。

表 1-7 在学中の就労等経験 2 - 大学を一時的に休んでおこなったもの

(%)

| | | 経験あり | | | | | | | | 対象者数 |
|----|----|---------------------|--|--|--|------------|-------------------------|-------------------------|------|--------|
| | | 経験なし (無回答 含む) | 大学での学 習内容や将 来就こうと 思っていた 仕事とは関 係ない仕事 | 大学での学 習内容や将 来就こうと 思っていた 仕事と関係 のある仕事 | 大学の単位 として認定 される企業 実習、イン ターンシッ プ | 子育て・ 家事 | 兵役 (JP票 設問な し) | 失業 (JP票 設問な し) | その他 | |
| 日本 | 男性 | 96.8 | 1.1 | 0.4 | 0.7 | | | | 1.4 | 1,808 |
| | 女性 | 98.3 | 0.3 | 0.1 | 0.1 | 0.1 | | | 1.2 | 1,613 |
| 合計 | 男性 | 47.5 | 37.2 | 30.4 | 2.4 | 10.8 | 5.5 | 5.1 | 17.1 | 15,403 |
| | 女性 | 45.2 | 36.0 | 33.0 | 8.8 | 0.1 | 4.7 | 5.4 | 18.9 | 18,607 |
| IT | 男性 | 27.7 | 38.4 | 20.9 | 7.8 | 5.2 | 32.8 | 4.6 | 7.4 | 1,453 |
| | 女性 | 35.5 | 37.3 | 23.5 | 5.9 | 11.6 | | 4.5 | 7.5 | 1,649 |
| ES | 男性 | 21.8 | 44.8 | 28.6 | 22.4 | 2.8 | 12.9 | 9.0 | 7.7 | 1,291 |
| | 女性 | 22.4 | 33.9 | 23.7 | 37.4 | 6.6 | 0.1 | 9.0 | 8.9 | 1,730 |
| FR | 男性 | 14.8 | 45.9 | 15.5 | 58.2 | 0.8 | 10.8 | 2.8 | 3.4 | 1,653 |
| | 女性 | 22.1 | 43.7 | 15.2 | 44.7 | 6.9 | 0.1 | 3.2 | 4.6 | 1,851 |
| AT | 男性 | 8.6 | 55.8 | 55.6 | 22.3 | 3.7 | 17.0 | 8.6 | 8.7 | 1,204 |
| | 女性 | 7.1 | 56.0 | 54.3 | 33.9 | 12.0 | | 8.0 | 8.8 | 1,102 |
| DE | 男性 | 10.2 | 45.1 | 43.3 | 52.4 | 2.0 | 3.9 | 1.8 | 4.3 | 2,108 |
| | 女性 | 9.4 | 46.9 | 36.8 | 60.2 | 6.3 | 0.3 | 3.1 | 5.3 | 1,572 |
| NL | 男性 | 10.3 | 48.0 | 27.3 | 68.5 | 1.3 | 5.0 | 3.8 | 6.5 | 1,382 |
| | 女性 | 11.8 | 43.0 | 26.6 | 67.0 | 4.4 | 0.2 | 2.9 | 9.6 | 1,737 |
| UK | 男性 | 12.7 | 64.8 | 25.6 | 23.9 | 1.4 | | 14.2 | 7.1 | 1,342 |
| | 女性 | 12.4 | 65.1 | 24.8 | 28.0 | 7.2 | | 7.3 | 4.0 | 1,963 |
| NO | 男性 | 9.8 | 60.8 | 43.2 | 21.8 | 3.7 | 17.8 | 6.7 | 6.7 | 1,442 |
| | 女性 | 8.0 | 51.1 | 47.1 | 46.7 | 16.3 | 0.1 | 3.7 | 6.8 | 2,082 |
| FI | 男性 | 5.3 | 57.8 | 72.8 | 34.4 | 3.8 | 21.4 | 6.5 | 4.7 | 1,046 |
| | 女性 | 7.3 | 59.9 | 65.8 | 34.3 | 13.4 | 0.2 | 5.4 | 4.6 | 1,615 |
| SE | 男性 | 49.8 | | 46.4 | | | | 6.3 | | 1,180 |
| | 女性 | 50.3 | | 46.5 | | | | 6.2 | | 1,515 |
| CZ | 男性 | 22.7 | 60.7 | 43.2 | | 2.2 | | | | 1,302 |
| | 女性 | 23.1 | 55.6 | 41.8 | | 10.8 | | | | 1,791 |

注:各項目に対して月数を回答したが、経験なしと無回答は日本票以外識別不可能。

設問: 大学在学中、大学を一時的に休んで次のようなことを主にされていた時期がありますか

さらに、在学中の海外経験の比率は、日本ではまだ1割に達していないのに対して、欧州では日本の倍以上、卒業者の2割近くに達している。なお、海外経験の目的として日本では学習目的のものにほとんど限られるのに対して、欧州では、学習目的も多くあるけれども、それだけではなく他方で労働実習なども1割を越えている(表1-8)。

このように「就業体験」は多様な形態で獲得される。大学が組織しあるいは指導した「職業体験的な学習」や、学生個人が自ら自発的に選択して経験した「就業活動」(アルバイトを含む)を含めて、在学中の就業体験が在学した高等教育機関での専門分野の学習とどのように関連していたのか、その評価を求めた結果が表1-9である。

表 1-8 在学中の海外経験

(%)

| | 経験あり | 内訳(再掲) | | | 経験者 総数(内 訳無回 答含む) | 対象者 数(無 回答含 む) | |
|----|------|--------|---------------------------|------|----------------------------|-------------------------|-------|
| | | 学習 | 労働実 習・イン ターンシッ プ | その他 | | | |
| 日本 | 11.8 | 78.5 | 2.2 | 22.5 | 402 | 3,421 | |
| 合計 | 22.5 | 63.2 | 44.5 | 16.3 | 7,082 | 31,445 | |
| 欧州 | IT | 20.1 | 80.4 | 12.4 | 19.8 | 622 | 3,102 |
| | ES | 13.7 | 77.8 | 29.9 | 14.5 | 415 | 3,021 |
| | FR | 20.1 | 61.6 | 48.4 | 14.2 | 699 | 3,504 |
| | AT | 28.3 | 50.8 | 39.1 | 20.3 | 655 | 2,311 |
| | DE | 20.7 | 53.6 | 46.9 | 16.5 | 765 | 3,700 |
| | NL | 29.7 | 80.0 | 69.7 | 21.5 | 938 | 3,156 |
| | UK | 24.2 | 54.3 | 45.0 | 20.6 | 806 | 3,327 |
| | NO | 19.1 | 80.4 | 20.8 | 14.6 | 678 | 3,559 |
| | FI | 26.9 | 57.5 | 53.8 | 5.1 | 720 | 2,672 |
| CZ | 25.3 | 42.6 | 57.5 | 14.2 | 782 | 3,093 | |

注: 欧州対象国は、スウェーデンを除く。

設問: あなたは高等教育在学中に、学習や研修などのために海外に出かけたことがありますか。

表 1-9 在学中の就業体験と大学での学習内容との関連性

| | 平均値 | 標準偏差 | N | |
|----|------|------|--------|-------|
| 日本 | 2.03 | 1.26 | 3,257 | |
| 合計 | 2.87 | 1.38 | 25,046 | |
| 欧州 | FR | 3.24 | 1.40 | 2,619 |
| | NL | 3.22 | 1.25 | 2,870 |
| | AT | 3.08 | 1.38 | 2,169 |
| | DE | 3.07 | 1.29 | 3,306 |
| | NO | 3.02 | 1.51 | 2,908 |
| | FL | 2.97 | 1.48 | 2,672 |
| | CZ | 2.65 | 1.11 | 2,601 |
| | ES | 2.50 | 1.58 | 1,582 |
| | IT | 2.30 | 1.39 | 1,750 |
| UK | 2.20 | 1.51 | 2,569 | |

設問: 在学中に経験された仕事は、大学での学習内容との程度関係がありましたか。(平均値は、「非常に関係がある」=5点 ~ 「まったく関係がない」=1点とした場合の数値)

得点の高い方が、関連性を高く認識していることになるが、もっとも高く評価しているのは、フィンランド、オランダ、ノルウェーの卒業生であり、もっとも低く評価しているのが日本である。日本に近いのは、イギリス、イタリア、スペインである。

3. 職業への移行と初期キャリア

1) 欧州における専門職就職、日本における昇進

表1-10は、大学卒業後3年を経た段階での職業である。

有業者の比率はどこでも8、9割で同じ程度であるが²⁾、有業者の中では、欧州では圧倒的多数が「専門的職業」に就職しているのに対して、日本では専門的職業の比率は男女ともに低く、「事務的職業」「サービス職および販売職」の比率が高い(表1-10)。ただし、日本でも昇進等を通してこうした職業的地位へと移動するという日本的なキャリア形成の特質は、卒業後の年数の長い卒業者の調査からよみとることができる。

表1-10 現在の職業(国際標準職業大分類)

| | | 管理的 職業 | 専門的 職業 | 準専門 職業、 テクニ シャン | 事務 的職 業 | サービ ス職 および 販売 職 | 農業、 漁業 の熟 練作 業者 | 職人及 び関連 職務の 従事者 | 装置な いし機 械の運 転作業 者 | 単純 作業 の従 事者 | その他 (自衛 官を含 む) | 有職者 数(職業 無回答 を含む) | 有職者 比率 | 対象総 数(無回 答を含 む) |
|----|----|-----------|-----------|--------------------------|---------------|-----------------------------|-----------------------------|--------------------------|-------------------------------|----------------------|-------------------------|----------------------------|-----------|--------------------------|
| 日本 | 男性 | 6.1 | 38.8 | 3.7 | 22.1 | 20.3 | 0.5 | 1.4 | 1.6 | 5.5 | | 1,573 | 87.0 | 1,808 |
| | 女性 | 2.3 | 39.6 | 3.2 | 37.3 | 10.7 | 0.2 | 1.1 | 0.1 | 5.6 | | 1,290 | 80.0 | 1,613 |
| 合計 | 男性 | 11.2 | 63.4 | 17.0 | 2.9 | 1.0 | 0.2 | 0.5 | 0.4 | 0.7 | 2.8 | 10,342 | 85.4 | 12,115 |
| | 女性 | 10.4 | 53.8 | 23.1 | 4.9 | 1.8 | 0.1 | 0.2 | 0.1 | 0.7 | 4.9 | 11,989 | 77.2 | 15,520 |
| IT | 男性 | 4.8 | 57.6 | 30.4 | 5.1 | 1.3 | 0.2 | 0.2 | 0.1 | 0.3 | | 1,186 | 81.6 | 1,453 |
| | 女性 | 2.6 | 57.0 | 28.6 | 8.4 | 2.8 | | 0.1 | 0.1 | 0.3 | | 1,170 | 71.0 | 1,649 |
| ES | 男性 | 11.0 | 63.7 | 3.9 | 12.0 | 2.7 | | 0.3 | 1.0 | 5.4 | | 766 | 59.3 | 1,291 |
| | 女性 | 5.5 | 62.6 | 2.7 | 17.1 | 5.9 | | 0.2 | 0.1 | 5.9 | | 852 | 49.2 | 1,730 |
| FR | 男性 | 18.3 | 51.3 | 22.2 | 2.4 | 1.7 | 0.2 | 1.4 | 1.5 | 1.0 | | 1,262 | 76.3 | 1,653 |
| | 女性 | 18.7 | 39.9 | 28.3 | 7.8 | 3.6 | 0.1 | 0.3 | 0.5 | 0.9 | | 1,281 | 69.2 | 1,851 |
| AT | 男性 | 2.3 | 90.4 | | 0.5 | | | | | | 6.8 | 1,121 | 93.1 | 1,204 |
| | 女性 | 1.3 | 87.3 | | 2.7 | | | | | 0.1 | 8.5 | 901 | 81.8 | 1,102 |
| NL | 男性 | 23.1 | 47.8 | 23.2 | 4.0 | 0.4 | 0.1 | 0.9 | 0.3 | 0.1 | | 1,188 | 86.0 | 1,382 |
| | 女性 | 24.3 | 42.4 | 26.1 | 4.8 | 1.8 | 0.1 | 0.2 | 0.1 | 0.1 | | 1,426 | 82.1 | 1,737 |
| UK | 男性 | 20.8 | 59.0 | 11.8 | 3.9 | 2.5 | 0.4 | 0.8 | 0.3 | 0.4 | | 1,190 | 88.7 | 1,342 |
| | 女性 | 21.8 | 48.8 | 19.1 | 6.5 | 2.5 | | 0.4 | 0.1 | 0.9 | | 1,699 | 86.6 | 1,963 |
| NO | 男性 | 4.7 | 64.9 | 29.7 | | 0.2 | 0.1 | 0.2 | 0.1 | 0.1 | | 1,369 | 94.9 | 1,442 |
| | 女性 | 5.2 | 37.0 | 57.0 | 0.3 | 0.3 | 0.1 | 0.1 | | 0.1 | | 1,928 | 92.6 | 2,082 |
| FI | 男性 | 6.9 | 66.6 | 3.3 | 0.6 | 0.2 | 0.4 | 0.1 | 0.2 | 0.2 | 21.3 | 965 | 92.3 | 1,046 |
| | 女性 | 3.0 | 54.7 | 3.6 | 1.4 | 0.6 | 0.3 | | | 0.1 | 36.2 | 1,402 | 86.8 | 1,615 |
| CZ | 男性 | 8.4 | 73.0 | 17.2 | 0.4 | 0.6 | 0.1 | 0.2 | 0.1 | 0.1 | | 1,210 | 92.9 | 1,302 |
| | 女性 | 4.5 | 78.3 | 15.3 | 1.4 | 0.4 | 0.1 | | | | | 1,330 | 74.3 | 1,791 |

注: 欧州対象国は、ドイツ、スウェーデンを除く。

設問 現在の仕事(主要な仕事)の職業は何ですか。

2) 欧州での遅い就職活動開始

日本では8割前後の卒業生が就職活動を行い、その95%以上は卒業前に始めている。

2) 日本の大卒女性では卒業後3年経過段階で8割が仕事をしており、九州大学調査の卒業8~10年経過女性では4割強は就業していない。

一方、欧州では就職活動をした者の比率自体は日本と比較してやや低い程度である。しかし、その活動開始時期の内訳をみると、卒業前から始めた者は4割に満たず、卒業後から始めた者も3割近くであり、大きな差異がある。欧州内でも国ごとの違いが大きく、スウェーデン、ノルウェー、英国、ドイツでは、就職活動を卒業前に始めた者が多くなっている（表1-11）。

表1-11 就職活動の開始時期

| | | 就職活動をした | | | | | 就職活動をしなかった | 対象数 (無回答を含む) |
|----|----|------------|------|-------|------------------|--------|------------|-----------------|
| | | 内訳(活動=100) | | | 対象数 小計(無回答含む) | | | |
| | | 卒業前から | 卒業時 | 卒業後から | | | | |
| 日本 | 男性 | 77.0 | 88.4 | 1.9 | 1.1 | 1,393 | 22.4 | 1,808 |
| | 女性 | 82.8 | 87.6 | 1.7 | 0.8 | 1,335 | 16.5 | 1,613 |
| 合計 | 男性 | 67.1 | 36.8 | 26.7 | 28.3 | 9,530 | 31.3 | 14,223 |
| | 女性 | 72.3 | 37.6 | 30.7 | 23.9 | 12,336 | 25.7 | 17,092 |
| IT | 男性 | 60.6 | 15.7 | 39.6 | 43.7 | 881 | 37.4 | 1,453 |
| | 女性 | 66.9 | 14.0 | 44.7 | 40.3 | 1,103 | 30.9 | 1,649 |
| ES | 男性 | 69.0 | 23.2 | 30.0 | 44.7 | 874 | 29.1 | 1,291 |
| | 女性 | 74.1 | 21.6 | 37.7 | 38.7 | 1,260 | 24.9 | 1,730 |
| FR | 男性 | 82.0 | 9.2 | 5.1 | 37.9 | 1,355 | 17.4 | 1,653 |
| | 女性 | 81.1 | 10.2 | 12.2 | 25.7 | 1,501 | 17.8 | 1,851 |
| AT | 男性 | 51.7 | 28.9 | 39.3 | 29.5 | 623 | 45.8 | 1,204 |
| | 女性 | 58.6 | 31.9 | 40.7 | 25.4 | 646 | 38.4 | 1,102 |
| DE | 男性 | 63.0 | 53.6 | 31.2 | 14.7 | 1,329 | 33.2 | 2,108 |
| | 女性 | 59.1 | 40.5 | 39.2 | 19.5 | 929 | 31.7 | 1,572 |
| NL | 男性 | 70.8 | 41.9 | 34.3 | 23.0 | 978 | 28.7 | 1,382 |
| | 女性 | 75.6 | 43.3 | 38.5 | 18.1 | 1,313 | 23.9 | 1,737 |
| UK | 男性 | 84.1 | 50.2 | 21.3 | 25.2 | 1,128 | 14.2 | 1,342 |
| | 女性 | 84.0 | 48.2 | 20.4 | 27.2 | 1,648 | 14.2 | 1,963 |
| NO | 男性 | 76.0 | 57.1 | 21.7 | 19.6 | 1,096 | 23.2 | 1,442 |
| | 女性 | 82.7 | 62.5 | 23.4 | 12.5 | 1,722 | 16.1 | 2,082 |
| FI | 男性 | 58.8 | 42.8 | 37.7 | 15.8 | 615 | 40.2 | 1,046 |
| | 女性 | 69.6 | 40.7 | 40.9 | 15.2 | 1,124 | 29.3 | 1,615 |
| CZ | 男性 | 50.0 | 43.9 | 24.4 | 31.6 | 651 | 50.0 | 1,302 |
| | 女性 | 60.9 | 52.9 | 27.7 | 19.4 | 1,090 | 39.1 | 1,791 |

注：欧州対象国はスウェーデンを除く各国。

3) 日本でも多様化した就職活動

就職活動の経路としては、日欧ともに、求人情報誌など各種の求人情報を活用する者が7割以上となっている（表1-12）。九州大学調査（1988-90年卒）の結果と比較して、日本でも1990年代の不況を反映して、95年卒の方がより多く「求人情報誌等」を活用するようになっている。逆に、「会社からの誘い」を受けた比率は、近年明らかに減少している。

表 1-12 就職活動の方法

(複数回答、%)

| | | 求人票や求人情報誌・求人広告を見て応募 | 求人があるかどうか知らずに会社に接触した | 自分で仕事を求める広告を出した | 会社から誘いを受けた | 公共職業安定所や学生職業センターを利用した | 民間の職業紹介機関を利用した | 大学の就職部や就職情報室を利用した | 大学の先生に相談した | 在学中に仕事をして関係をつくった | その他の個人的なつてを利用した(親、親戚、友人など) | 自分で企業を起こした/自営を始めた | その他 | 対象数(無回答を含む) |
|----|----|---------------------|----------------------|-----------------|------------|-----------------------|----------------|-------------------|------------|------------------|----------------------------|-------------------|-------|-------------|
| 日本 | 男性 | 70.6 | 11.3 | 0.9 | 16.9 | 11.0 | 13.1 | 57.5 | 23.3 | 2.7 | 20.0 | 0.3 | 8.5 | 1,393 |
| | 女性 | 73.3 | 16.3 | 0.7 | 6.1 | 15.3 | 13.0 | 66.7 | 22.5 | 3.0 | 21.5 | 0.4 | 12.2 | 1,335 |
| 合計 | 男性 | 65.8 | 55.8 | 6.8 | 14.4 | 35.1 | 16.2 | 18.0 | 10.0 | 20.1 | 31.3 | 3.4 | 7.4 | 10,727 |
| | 女性 | 65.8 | 52.6 | 6.5 | 13.2 | 37.3 | 18.2 | 15.5 | 7.1 | 18.5 | 28.6 | 2.2 | 9.6 | 13,873 |
| IT | 男性 | 51.2 | 72.9 | 9.8 | 23.8 | 34.4 | 13.3 | 10.2 | 13.6 | 12.1 | 52.4 | 9.9 | 7.2 | 881 |
| | 女性 | 48.0 | 71.6 | 10.8 | 15.9 | 46.2 | 15.0 | 11.0 | 11.5 | 8.8 | 54.5 | 6.8 | 7.1 | 1,103 |
| ES | 男性 | 61.2 | 42.6 | 8.1 | 8.9 | 46.2 | 29.3 | 37.6 | 9.3 | 13.4 | 49.2 | 4.4 | 32.4 | 891 |
| | 女性 | 56.5 | 42.3 | 12.2 | 6.8 | 54.5 | 33.9 | 39.1 | 7.5 | 11.1 | 44.4 | 2.4 | 43.5 | 1,282 |
| FR | 男性 | 40.7 | 44.1 | 12.9 | 5.2 | 35.1 | 11.2 | 11.1 | 4.6 | 14.0 | 19.3 | 0.5 | 5.9 | 1,355 |
| | 女性 | 40.4 | 42.2 | 13.3 | 4.0 | 34.3 | 8.3 | 6.9 | 3.9 | 10.1 | 20.2 | 0.5 | 7.0 | 1,501 |
| AT | 男性 | 70.0 | 67.1 | 14.0 | 4.8 | 29.2 | 13.3 | 12.2 | 10.4 | 24.6 | 36.9 | 5.6 | 4.3 | 623 |
| | 女性 | 67.2 | 69.3 | 13.8 | 3.9 | 34.5 | 11.0 | 14.4 | 7.1 | 24.6 | 33.3 | 5.1 | 6.7 | 646 |
| DE | 男性 | 79.7 | 67.7 | 11.5 | 11.8 | 41.8 | 3.6 | 7.4 | 9.4 | 28.6 | 27.0 | 4.4 | 7.7 | 1,329 |
| | 女性 | 74.5 | 57.4 | 8.9 | 11.1 | 42.2 | 4.6 | 6.2 | 6.0 | 27.1 | 24.1 | 4.7 | 11.8 | 929 |
| NL | 男性 | 83.3 | 69.5 | 1.1 | 17.8 | 39.0 | 53.7 | 11.0 | 12.6 | 27.9 | 38.5 | 2.5 | 4.5 | 978 |
| | 女性 | 83.9 | 68.1 | 0.2 | 20.4 | 42.9 | 52.7 | 11.7 | 11.5 | 33.1 | 35.6 | 1.8 | 5.6 | 1,313 |
| UK | 男性 | 63.9 | 41.9 | 1.3 | 10.0 | 24.6 | 27.4 | 41.5 | 11.3 | 18.2 | 29.1 | 1.2 | 5.6 | 1,128 |
| | 女性 | 69.5 | 37.3 | 0.6 | 8.1 | 22.5 | 23.4 | 34.4 | 9.2 | 14.4 | 21.9 | 0.9 | 7.1 | 1,648 |
| NO | 男性 | 83.9 | 44.8 | 2.2 | 19.5 | 27.7 | 8.2 | 6.0 | 11.6 | 19.2 | 21.5 | 1.2 | 4.7 | 1,096 |
| | 女性 | 85.9 | 34.8 | 0.8 | 17.7 | 23.9 | 5.5 | 2.4 | 5.3 | 18.3 | 13.0 | 0.3 | 4.3 | 1,722 |
| FI | 男性 | 72.4 | 57.9 | 10.1 | 22.8 | 43.4 | 3.3 | 28.1 | 14.5 | 30.2 | 4.6 | 3.6 | 615 | |
| | 女性 | 72.9 | 65.6 | 12.4 | 18.2 | 42.3 | 3.5 | 23.7 | 6.7 | 25.4 | 2.0 | 4.6 | 1,124 | |
| SE | 男性 | 60.3 | 54.6 | 1.2 | 14.7 | 30.9 | 3.3 | 3.3 | 6.4 | 17.5 | 19.2 | 3.4 | 1,180 | |
| | 女性 | 64.9 | 51.4 | 0.9 | 14.3 | 41.2 | 2.0 | 2.0 | 2.8 | 19.5 | 18.2 | 4.3 | 1,515 | |
| CZ | 男性 | 61.8 | 62.1 | 4.6 | 28.1 | 37.8 | 18.1 | 20.4 | 11.4 | 20.3 | 37.3 | 3.5 | 2.3 | 651 |
| | 女性 | 56.2 | 66.6 | 6.8 | 22.8 | 36.1 | 18.1 | 19.4 | 8.9 | 18.1 | 37.1 | 1.6 | 5.0 | 1,090 |

欧州と比較すると、大学の就職部利用や大学の先生との相談は、日本できわめて一般的である。日本の中でも、その就職指導の組織を積極的に使う程度は、大学や専門分野によって大きく異なっている。国立と私立に分けると、文科系の場合には圧倒的に私立大学である。

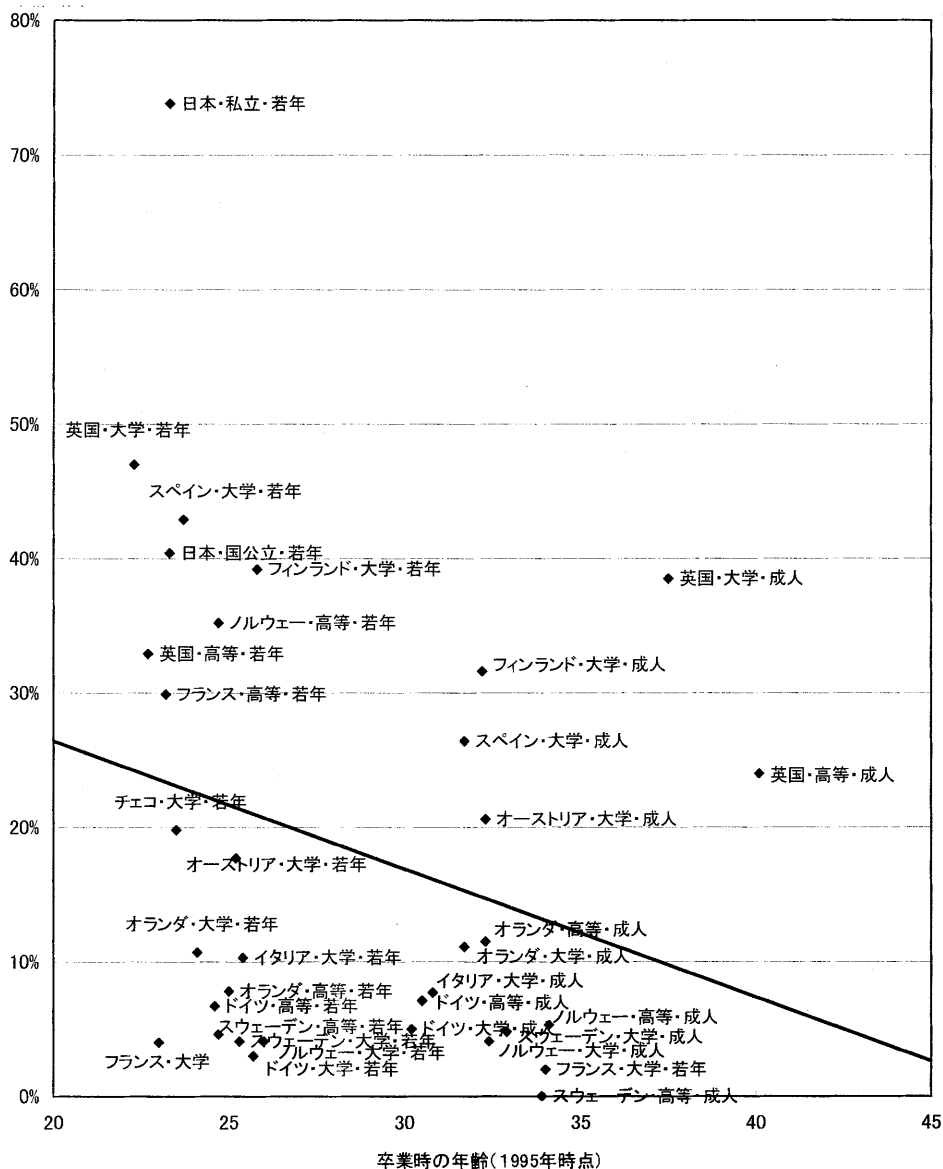
このことは、図1-1で、高等教育機関の類型および年齢類型別に、大学組織による就職指導のサポート活動を活用している比率を示したのものからも明らかである。文科系の私立大学卒業者は74.9%が就職部を活用しているのに対して、国公立大学卒業文系では41.4%であり、この比率はイギリス旧大学の若年卒業者の就職指導組織利用48.2%よりもむしろ低くなっている。つまり、図からあきらかなように、若年学生は、一般に何らかのサポートが必要であり、現実にも、大学がそうした組織等をもち、卒業者がそうしたサポートを活用している傾向にある。そしてその典型が、日本の私立大学である。イギリスの旧大学でも伝統的に組織的な支援をしており、フランスの大学外の高等教育機関の若年修了者の場合も同様である。

欧州では、求人を確認せずに会社に接触した者も半数を超えており、就職活動に大学が関与する場合は少ないが、国による違いも大きく、英国などでは大学組織の役割が大きい。

「縁故」や「公共職業安定所」「民間の職業紹介機関」等の利用は、欧州の方が多く、差異点のひとつでもあるが、日本の大卒者も、最近就職した95年卒ではこうした活用が拡大しており、欧州型の多様な就職活動を行う傾向がみられる。

図1 大学支援の就職活動利用

人文・社会・法律・経営



4) 学卒後の初職獲得までの無業期間の過ごし方

日本で、高等教育修了者が上記のようなプロセスをへて円滑な職業への移行を達成しているのに対して、欧州では卒業後初職を獲得するまでに一定の無業期間がある。

表1-13は、日欧の高等教育修了者について無業期間の過ごし方を調べたものであるが、欧州では、家族や配偶者のいる地域で働くことを検討した者が3割と多く、また海外で働くことも2割を上回っている。このように、欧州の高等教育修了者が何らかの地域移動をキャリア設計の上で意識していることが分かる。いずれにせよ、高等教育修了から職業への移行までの段階での幅広い選択肢と多様なサポートを活用するのが欧州の高等教育修了者の移行特性である。

表1-13 無業期間の過ごし方

(多項目回答、%)

| | | アルバイト、パート | 派遣労働 | 自営(契約・フリーランスの仕事を含む) | 海外で働くこと | 家族や配偶者のいる地域で働くこと | 何も考えなかった | 無回答 | 対象数(無回答を含む) | |
|----|----|-----------|------|---------------------|---------|------------------|----------|------|-------------|-------|
| 日本 | 男性 | 4.8 | | 0.4 | 0.3 | 0.5 | | 88.4 | 1,393 | |
| | 女性 | 5.4 | | 0.2 | 0.7 | 1.3 | | 87.7 | 1,335 | |
| 合計 | 男性 | 16.3 | | 15.2 | 22.8 | 30.7 | 26.0 | 19.8 | 9,547 | |
| | 女性 | 24.4 | | 9.7 | 17.7 | 31.3 | 20.0 | 23.1 | 12,358 | |
| 欧州 | IT | 男性 | 40.1 | | 53.0 | 48.7 | 14.5 | 10.9 | 2.7 | 881 |
| | | 女性 | 61.1 | | 39.4 | 32.1 | 14.4 | 10.6 | 2.4 | 1,103 |
| | ES | 男性 | 29.7 | | 11.7 | 15.0 | 34.3 | 39.8 | 3.4 | 891 |
| | | 女性 | 31.8 | | 6.7 | 12.6 | 28.7 | 45.2 | 3.0 | 1,282 |
| | FR | 男性 | 7.7 | | 5.8 | 12.0 | 6.3 | 26.0 | 49.7 | 1,355 |
| | | 女性 | 17.1 | | 4.1 | 9.4 | 8.3 | 17.6 | 53.4 | 1,501 |
| | AT | 男性 | 7.4 | | 14.0 | 16.2 | 41.9 | 52.3 | 35.3 | 623 |
| | | 女性 | 12.5 | | 8.5 | 11.8 | 46.1 | 43.3 | 33.9 | 646 |
| | DE | 男性 | 2.3 | | 4.7 | 7.6 | 39.7 | 26.4 | 1.2 | 1,329 |
| | | 女性 | 5.4 | | 4.2 | 6.0 | 50.1 | 19.0 | 0.6 | 929 |
| | NL | 男性 | 16.3 | | 12.1 | 14.9 | 54.0 | 34.8 | | 978 |
| | | 女性 | 27.3 | | 9.0 | 10.7 | 57.7 | 31.0 | | 1,313 |
| | UK | 男性 | 16.7 | | 9.8 | 30.1 | 30.0 | | 5.9 | 1,128 |
| | | 女性 | 16.7 | | 4.7 | 26.5 | 36.4 | | 6.7 | 1,648 |
| | NO | 男性 | 13.0 | | 10.5 | 28.6 | 18.6 | | 47.0 | 1,096 |
| | | 女性 | 19.8 | | 5.1 | 17.1 | 16.4 | | 53.5 | 1,722 |
| | FI | 男性 | 29.9 | | 22.1 | 38.2 | 22.8 | 6.5 | 34.1 | 615 |
| | | 女性 | 32.9 | | 12.7 | 24.6 | 20.6 | 6.1 | 36.7 | 1,124 |
| | CZ | 男性 | 13.2 | | 25.8 | 33.0 | 63.3 | 23.2 | 20.1 | 651 |
| | | 女性 | 18.8 | | 8.5 | 23.1 | 52.8 | 18.4 | 29.2 | 1,090 |

注:ここでの対象者は、厳密には「無業者」ではなく、「就職活動をおこなった」とすでに回答した者。したがって、「無回答」には、国によっては無業期間がなかった者まで事実上含まれている。また、共通票では「アルバイト・パート」「派遣労働」に対応するものとして「パートタイム」があり、該当セルにはその数値を示している。更に、日本票には「何も考えなかった」がないため、変数合成上「無回答」をひくくめてある。

設問 就職が決まらないので、学部卒業後に引き続き就職活動をされた方に伺います。あなたは卒業後就職活動をされている間に、次のようなことをしようと思いましたが。

5) 欧州での高い職業満足度

日本大卒者の5割強が現在の職業生活に「とても満足」「やや満足」と回答しているが、特に就職後の期間が短い本サンプル(95年卒)では満足度は低くなっている。欧州諸国の該当比率7割と比べると、日本の大卒者で職業生活への満足度が低いことがわかる(表1-14)。

表1-14 職業の満足度

| | | (%) | | | | | |
|----|----|---------------|--------------|---------------|----------------|-----------------|--------|
| | | とても満足 している | やや満足し ている | どちらとも言 えない | あまり満足 していない | まったく満足 していない | 対象数 |
| 日本 | 男性 | 9.5 | 36.4 | 25.0 | 22.0 | 7.1 | 1,635 |
| | 女性 | 10.0 | 43.6 | 21.8 | 20.1 | 4.5 | 1,345 |
| 合計 | 男性 | 21.5 | 46.2 | 22.1 | 8.0 | 2.3 | 14,122 |
| | 女性 | 22.6 | 42.6 | 23.9 | 8.2 | 2.7 | 15,710 |
| IT | 男性 | 11.3 | 40.9 | 31.6 | 12.9 | 3.3 | 1,272 |
| | 女性 | 11.2 | 34.0 | 35.9 | 14.2 | 4.7 | 1,266 |
| ES | 男性 | 17.9 | 43.1 | 25.0 | 10.9 | 3.1 | 1,016 |
| | 女性 | 21.9 | 37.8 | 28.9 | 8.6 | 2.9 | 1,191 |
| FR | 男性 | 24.1 | 43.6 | 21.1 | 7.9 | 3.3 | 1,400 |
| | 女性 | 23.9 | 39.3 | 23.1 | 8.9 | 4.9 | 1,452 |
| AT | 男性 | 26.7 | 45.0 | 19.8 | 6.5 | 2.0 | 1,131 |
| | 女性 | 25.5 | 40.1 | 22.8 | 7.7 | 4.0 | 962 |
| DE | 男性 | 17.1 | 48.2 | 23.8 | 8.3 | 2.7 | 2,007 |
| | 女性 | 16.7 | 40.9 | 27.7 | 11.6 | 3.1 | 1,418 |
| NL | 男性 | 20.0 | 52.2 | 21.5 | 5.6 | 0.7 | 1,328 |
| | 女性 | 22.3 | 49.4 | 20.9 | 5.9 | 1.5 | 1,617 |
| UK | 男性 | 16.2 | 40.8 | 25.2 | 12.7 | 5.1 | 1,242 |
| | 女性 | 21.2 | 38.9 | 25.1 | 10.3 | 4.5 | 1,784 |
| NO | 男性 | 32.3 | 46.3 | 16.8 | 3.7 | 0.9 | 1,382 |
| | 女性 | 31.6 | 44.8 | 19.3 | 3.4 | 0.8 | 1,928 |
| FI | 男性 | 23.5 | 50.5 | 17.9 | 7.0 | 1.1 | 996 |
| | 女性 | 25.7 | 47.3 | 18.2 | 7.6 | 1.2 | 1,419 |
| SE | 男性 | 25.1 | 45.0 | 20.4 | 8.0 | 1.5 | 1,134 |
| | 女性 | 23.7 | 43.4 | 21.7 | 8.7 | 2.5 | 1,344 |
| CZ | 男性 | 23.8 | 51.3 | 18.5 | 5.5 | 0.9 | 1,214 |
| | 女性 | 21.3 | 49.8 | 22.6 | 5.4 | 0.8 | 1,329 |

設問 全体として、あなたはどの程度現在の仕事に満足していますか。

6) 日本の大卒者の高い年収

大卒者の年収をみると、平均年齢で欧州よりも約3歳若い日本の大卒男性は392万円、大卒女性304万円であり、欧州では平均年収は男性360万円、女性283万円であり、日本の方が若くしてほぼ1割多い年収を得ている。

欧州内での個人間の分散、国ごとの差異も大きい。もっとも高いノルウェーともっとも低いチェコでは、平均年収に約5倍の開きがある。日本よりも高い年収(男性の場合)を得ているのは、ノルウェー485万円をはじめ、ドイツ、オーストリア、フィンランド、英国である(表1-15)。

表1-15 現在の年収（税込み：すべての仕事の合計）

| | | (万円) | | | |
|----|----|-----------|-------|--------|-------------|
| | | 年収平均 値 | 標準偏差 | 対象数 | 集計比率 (%) |
| 日本 | 男性 | 381.5 | 116.3 | 1,574 | 87.1 |
| | 女性 | 304.4 | 117.8 | 1,272 | 78.4 |
| 合計 | 男性 | 330.9 | 244.6 | 10,615 | 82.7 |
| | 女性 | 271.1 | 277.0 | 11,256 | 73.3 |
| IT | 男性 | 238.8 | 153.7 | 1,053 | 72.5 |
| | 女性 | 187.2 | 142.2 | 963 | 58.4 |
| ES | 男性 | 212.0 | 106.2 | 805 | 62.4 |
| | 女性 | 159.5 | 87.4 | 821 | 47.5 |
| FR | 男性 | 315.9 | 142.6 | 1,256 | 76.0 |
| | 女性 | 252.3 | 117.8 | 1,202 | 64.9 |
| AT | 男性 | 414.8 | 175.6 | 1,054 | 87.5 |
| | 女性 | 322.8 | 165.6 | 840 | 76.2 |
| DE | 男性 | 478.6 | 204.1 | 1,912 | 90.7 |
| | 女性 | 364.6 | 157.1 | 1,269 | 80.7 |
| UK | 男性 | 410.9 | 236.2 | 1,161 | 86.5 |
| | 女性 | 330.0 | 157.9 | 1,663 | 84.7 |
| NO | 男性 | 487.4 | 151.9 | 1,371 | 95.1 |
| | 女性 | 371.1 | 103.1 | 1,869 | 89.8 |
| FI | 男性 | 113.0 | 365.0 | 1,045 | 99.9 |
| | 女性 | 248.7 | 612.1 | 1,607 | 99.5 |
| CZ | 男性 | 81.1 | 90.0 | 958 | 73.6 |
| | 女性 | 59.3 | 46.3 | 1,022 | 57.1 |

注1: 欧州対象国はスウェーデン・オランダを除く。

注2: 1ユーロ=122.7円で換算

4. 大学知識と職業的能力

1) 日本での仕事能力の必要性の高さ

仕事で必要とされている能力・知識・技術について36項目を設定してたずねたところ、日欧の対象者とも、「問題解決の能力」や「コミュニケーション能力」をはじめとして、36項目中のほとんどの項目で、5段階尺度の中間値3点を上回っており、仕事の場で様々な能力が求められていることがわかる。

欧州と比較して、日本の大卒者の方がより強調している能力は、「仕事への適応能力」、「体や手先を使う仕事の技能」や「ものごとを経済的観点から理解する考え方」など20項目であり、欧州の大卒者の方がより強調しているのは、「独力で仕事ができる能力」「自分の責任で決定を下す力量」「学際的な知識や考え方」などの16項目である（表1-16）。

表1-16 職業で必要とされる能力・知識・技術・態度

| | 日本 | | 欧州 | |
|-----------------------|------|----|------|----|
| | 平均値 | 順位 | 平均値 | 順位 |
| 仕事への適応能力 | 4.35 | 1 | 3.93 | 21 |
| 問題解決の能力 | 4.31 | 2 | 4.29 | 3 |
| 話しことばによるコミュニケーション能力 | 4.30 | 3 | 4.30 | 2 |
| 綿密性・細部に目配りする能力 | 4.24 | 4 | 4.14 | 7 |
| 融通性・順応性 | 4.24 | 5 | 4.13 | 10 |
| プレッシャーの下でも仕事ができる精神力 | 4.22 | 6 | 4.28 | 4 |
| チームの中で仕事を遂行する能力 | 4.21 | 7 | 4.21 | 6 |
| 集中力 | 4.19 | 8 | 4.06 | 16 |
| 時間を管理できる力量 | 4.18 | 9 | 4.14 | 8 |
| 誠実さ | 4.16 | 10 | 4.07 | 13 |
| 自発的・自主性 | 4.13 | 11 | 4.12 | 11 |
| 情報やアイデアの収集し整理する能力 | 4.07 | 12 | 3.82 | 23 |
| 自分とは異なる考えを理解し、受容する力量 | 4.07 | 13 | 3.99 | 18 |
| 分析能力 | 4.06 | 14 | 3.94 | 20 |
| 学習能力 | 4.05 | 15 | 4.03 | 17 |
| 幅広い知識・教養 | 4.01 | 16 | 3.64 | 30 |
| コンピュータを使いこなす技能 | 3.96 | 17 | 3.77 | 24 |
| 自分の意見をはっきりと主張すること | 3.93 | 18 | 4.13 | 9 |
| 書きことばによるコミュニケーション能力 | 3.90 | 19 | 4.07 | 14 |
| ものごとを経済的観点から理解する考え方 | 3.90 | 20 | 3.48 | 33 |
| ものごとに没入できる能力・資質 | 3.89 | 21 | 4.07 | 15 |
| 規則を現実の場面で柔軟に運用する能力 | 3.88 | 22 | 3.63 | 31 |
| 独力で仕事ができる能力 | 3.88 | 23 | 4.33 | 1 |
| 交渉能力・折衝能力 | 3.88 | 24 | 3.66 | 29 |
| 自分の仕事を客観的に評価する能力 | 3.85 | 25 | 3.97 | 19 |
| 自分の責任で決定を下す力量 | 3.78 | 26 | 4.23 | 5 |
| 計画立案・調整・組織化の能力 | 3.76 | 27 | 4.10 | 12 |
| 創造性 | 3.72 | 28 | 3.72 | 25 |
| ものごとを批判的に吟味・検討する能力 | 3.69 | 29 | 3.90 | 22 |
| 特定の分野に関する理論的知識 | 3.63 | 30 | 3.70 | 26 |
| リーダーシップを発揮する力量 | 3.58 | 31 | 3.58 | 32 |
| 複雑な社会・組織・技術の体系を理解する能力 | 3.47 | 32 | 3.32 | 34 |
| 特定の分野で必要な方法論や分析技法の知識 | 3.43 | 33 | 3.68 | 27 |
| からだや手先を使う仕事の技能 | 3.41 | 34 | 2.91 | 35 |
| 学際的な知識や考え方 | 3.28 | 35 | 3.66 | 28 |
| 外国語の能力 | 2.73 | 36 | 2.84 | 36 |

設問: 以下に示す様々な知識・能力・技能は現在の仕事の中でどの程度必要とされていますか。(「非常に必要」=5点、「まったく必要ない」=1点とする5段階尺度で回答)

2) 日本で低い大学知識・能力の自己評価

これに対して、大学卒業時点までに修得していた知識・能力・技能について同じ36項目で卒業者に自己評価してもらおうと、日本の大卒者でもっとも評価の高かった回答は「誠実さ」「集中力」「ものごとに没頭できる能力・資質」などであり、反対に評価が低かったのは「外国語の能力」「コスト感覚をもってものごとに対処する能力」「交渉能力・折衝能力」「コンピュータを扱うスキル」である(表1-17)。

表1-17 大学卒業時点までに身につけた能力・知識・技術・態度

| | 日本 | | 欧州 | |
|-----------------------|------|----|------|----|
| | 平均値 | 順位 | 平均値 | 順位 |
| 誠実さ | 3.91 | 1 | 3.88 | 4 |
| 集中力 | 3.71 | 2 | 3.94 | 3 |
| ものごとくに没入できる能力・資質 | 3.68 | 3 | 3.82 | 6 |
| 融通性・順応性 | 3.61 | 4 | 3.77 | 9 |
| 学習能力 | 3.49 | 5 | 4.16 | 1 |
| 仕事への適応能力 | 3.43 | 6 | 3.66 | 15 |
| 自発的・自主性 | 3.43 | 7 | 3.55 | 20 |
| 自分とは異なる考えを理解し、受容する力量 | 3.39 | 8 | 3.76 | 10 |
| チームの中で仕事を遂行する能力 | 3.33 | 9 | 3.69 | 13 |
| ものごとを批判的に吟味・検討する能力 | 3.33 | 10 | 3.79 | 8 |
| 特定の分野に関する理論的知識 | 3.31 | 11 | 3.82 | 7 |
| 自分の意見をはっきりと主張すること | 3.30 | 12 | 3.52 | 21 |
| 話しことばによるコミュニケーション能力 | 3.27 | 13 | 3.65 | 16 |
| 分析能力 | 3.24 | 14 | 3.67 | 14 |
| 問題解決の能力 | 3.18 | 15 | 3.63 | 17 |
| 幅広い知識・教養 | 3.17 | 16 | 3.70 | 12 |
| からだや手先を使う仕事の技能 | 3.16 | 17 | 3.01 | 30 |
| 書きことばによるコミュニケーション能力 | 3.14 | 18 | 3.87 | 5 |
| 綿密性・細部に目配りする能力 | 3.06 | 19 | 3.73 | 11 |
| 特定の分野に必要な方法論や分析技法の知識 | 3.05 | 20 | 3.43 | 23 |
| 自分の仕事を客観的に評価する能力 | 3.04 | 21 | 3.58 | 18 |
| 時間を管理できる力量 | 3.02 | 22 | 3.35 | 26 |
| プレッシャーの下でも仕事ができる精神力 | 3.02 | 23 | 3.55 | 19 |
| 情報やアイデアの収集・整理する能力 | 3.02 | 24 | 3.32 | 27 |
| 創造性 | 3.02 | 25 | 3.41 | 25 |
| 独力で仕事ができる能力 | 2.98 | 26 | 3.95 | 2 |
| 学際的な知識や考え方 | 2.96 | 27 | 3.41 | 24 |
| 自分の責任で決定を下す力量 | 2.91 | 28 | 3.43 | 22 |
| 規則を現実の場面で柔軟に運用する能力 | 2.88 | 29 | 3.01 | 29 |
| リーダーシップを発揮する力量 | 2.87 | 30 | 2.88 | 33 |
| 複雑な社会・組織・技術の体系を理解する能力 | 2.53 | 31 | 2.80 | 34 |
| 計画立案・調整・組織化の能力 | 2.52 | 32 | 3.16 | 28 |
| 外国語の能力 | 2.52 | 33 | 3.00 | 31 |
| ものごとを経済的観点から理解する考え方 | 2.51 | 34 | 2.78 | 35 |
| 交渉能力・折衝能力 | 2.51 | 35 | 2.66 | 36 |
| コンピュータを使いこなす技能 | 2.49 | 36 | 2.90 | 32 |

設問：以下に示す様々な知識・能力・技能を、あなたは大学学部卒業の時点で、どの程度身につけていましたか。（「十分身につけていた」=5点、「ぜんぜん身に付いていなかった」=1点とする5段階尺度で回答）

欧州では、ほとんどの項目で日本よりも能力修得に関する自己評価が高い。とくに差異が大きい「独力で仕事ができる能力」の項目をみると、欧州では、36項目中第2位、平均値3.95であるのに対して、日本では2.97（第26位）と約1ポイントの違いがある。全体的に見ると、独力で仕事をマネジメントする際の能力に関する評価に違いが見られる。なお、大卒時の修得能力の自己評価が、中間値（3点）を上回った項目数は23項目であるのに対し、欧州では30項目ある。

3) 大学知識と仕事で必要な能力との乖離

必要度と修得度を比較すると、日欧で共通する面も多い。仕事での必要性が高く、卒業時点の自己評価が低い項目は、日欧とも「交渉能力・折衝能力」「計画立案・調整・組織化の能力」「コンピュータを使いこなす技能」などである。

卒業時の評価は高いが、仕事での必要性が低い項目は、日欧共通で「からだや手先を使う仕事の技能」「特定の分野に関する理論的知識」「学習能力」「外国語の能力」などである。

4) 年齢と相関する、大学知識の仕事への活用度

大学で獲得した知識・技能を仕事でどのくらい活用しているかをみると、日本では「頻繁に使っている」「かなり使っている」を合わせて、男性21.4%、女性24.6%（「無回答・その他」は母数から除外し「現在の仕事には高等教育の学習内容は無関係」は母数に含めた計算）である（表1-18）。

表1-18 大学で獲得した知識・技能の活用度

(単一回答。%)

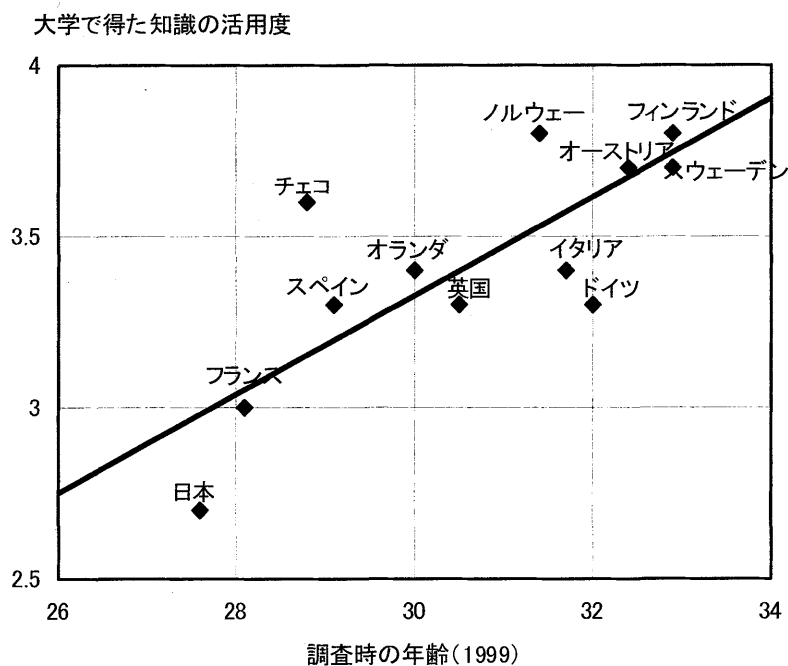
| | | 頻繁に使っている | かなり使っている | やや使っている | あまり使っていない | 全く使っていない | 現在の仕事には高等教育の学習内容は無関係 | その他 | 対象者数 (無回答含む) |
|----|----|----------|----------|---------|-----------|----------|----------------------|-----|-----------------|
| 日本 | 男性 | 7.6 | 14.0 | 31.2 | 32.7 | 9.0 | 5.5 | 0.0 | 1,483 |
| | 女性 | 10.9 | 13.1 | 31.7 | 27.6 | 7.4 | 9.2 | 0.0 | 1,075 |
| 合計 | 男性 | 17.6 | 28.5 | 26.9 | 14.5 | 3.1 | | | 14,223 |
| | 女性 | 20.5 | 25.1 | 22.8 | 11.8 | 3.0 | | | 17,092 |
| IT | 男性 | 15.3 | 27.0 | 26.9 | 14.2 | 4.6 | | | 1,453 |
| | 女性 | 16.4 | 21.9 | 23.2 | 10.7 | 4.9 | | | 1,649 |
| ES | 男性 | 13.2 | 22.2 | 21.0 | 16.0 | 4.3 | | | 1,291 |
| | 女性 | 17.3 | 16.7 | 17.5 | 11.9 | 3.7 | | | 1,730 |
| FR | 男性 | 5.4 | 20.4 | 29.7 | 19.2 | 5.0 | | | 1,653 |
| | 女性 | 5.1 | 15.6 | 26.1 | 20.5 | 5.5 | | | 1,851 |
| AT | 男性 | 24.1 | 28.3 | 25.8 | 13.5 | 1.7 | | | 1,204 |
| | 女性 | 19.1 | 24.8 | 26.2 | 12.4 | 3.0 | | | 1,102 |
| EU | 男性 | 13.0 | 27.3 | 33.8 | 18.7 | 2.5 | | | 2,108 |
| | 女性 | 12.5 | 24.8 | 30.3 | 17.9 | 3.2 | | | 1,572 |
| NL | 男性 | 10.9 | 38.0 | 32.3 | 13.5 | 1.3 | | | 1,382 |
| | 女性 | 13.0 | 36.3 | 30.6 | 12.2 | 1.5 | | | 1,737 |
| UK | 男性 | 18.2 | 26.7 | 25.2 | 15.3 | 7.2 | | | 1,342 |
| | 女性 | 25.2 | 23.1 | 23.0 | 14.1 | 5.8 | | | 1,963 |
| NO | 男性 | 28.8 | 35.4 | 24.4 | 6.8 | 0.6 | | | 1,442 |
| | 女性 | 38.6 | 34.4 | 16.5 | 3.2 | 0.1 | | | 2,082 |
| FI | 男性 | 30.9 | 32.3 | 19.5 | 11.4 | 1.6 | | | 1,046 |
| | 女性 | 34.7 | 29.9 | 15.5 | 7.6 | 1.1 | | | 1,615 |
| CZ | 男性 | 24.7 | 30.1 | 24.3 | 12.2 | 1.9 | | | 1,302 |
| | 女性 | 19.9 | 22.2 | 21.9 | 8.5 | 1.5 | | | 1,791 |

注:欧州対象国は、スウェーデンを除く。

設問:あなたの現在の仕事全体を考えた場合、在学中に獲得した知識や技能をどのくらい使っていますか。

欧州では、男女とも5割近くの者が、大学での知識を比較的活用していると回答している。日欧の国単位で卒業者の平均年齢と大学知識の活用度との相関をとっても、大卒者の年齢が高い国ほど卒業者の大学知識活用度が高い有意な傾向がみられた（図1-2：12ヶ国の相関係数は0.761）。

図1-2 大卒者の年齢と大学知識の活用度



5) 学歴と仕事の対応度と不对応の理由

つぎに、個々の大学知識というよりも、総体としての学歴資格が現在の仕事と対応しているかどうか、高等教育修了者にたずねてみると、表1-19のとおり、欧州側でも仕事と学歴との不对応を認識している者も多い。もっとも対応性が高いのは、ノルウェーであり、半数以上の男女が自分の学歴と仕事は「完全に対応している」と答えており、フィンランド、チェコ、オランダでも高い比率となっている。しかし、逆にスペイン、フランスでは日本の大卒者と同程度の対応性の評価をしており、特に、フランス、スペイン、イタリアの女性では日本以上に仕事と学歴の不对応を意識していることが明らかである。

表 1-19 仕事と学歴の適合度

(単一回答。%)

| | | 完全にふさわしい | ややふさわしい | どちらとも言えない | あまりふさわしくない | まったくふさわしくない | 対象者数 (無回答含む) |
|----------|----|----------|---------|-----------|------------|-------------|-----------------|
| 日本 | 男性 | 10.2 | 27.0 | 33.8 | 12.4 | 5.8 | 1,808 |
| | 女性 | 11.7 | 27.3 | 28.3 | 10.7 | 4.1 | 1,613 |
| 合計 | 男性 | 30.8 | 33.2 | 16.5 | 7.2 | 2.8 | 14,223 |
| | 女性 | 32.1 | 25.9 | 13.8 | 7.5 | 3.6 | 17,092 |
| IT | 男性 | 16.7 | 27.5 | 27.6 | 11.9 | 4.1 | 1,453 |
| | 女性 | 14.1 | 20.4 | 22.0 | 14.5 | 5.3 | 1,649 |
| ES | 男性 | 21.5 | 28.3 | 14.9 | 8.0 | 3.8 | 1,291 |
| | 女性 | 21.0 | 21.9 | 12.8 | 7.6 | 3.7 | 1,730 |
| FR | 男性 | 24.0 | 28.6 | 14.0 | 8.9 | 4.2 | 1,653 |
| | 女性 | 21.0 | 20.5 | 14.6 | 9.6 | 6.7 | 1,851 |
| AT | 男性 | 25.5 | 37.9 | 21.4 | 6.2 | 2.5 | 1,204 |
| | 女性 | 23.9 | 28.2 | 18.0 | 9.7 | 5.7 | 1,102 |
| 欧州 DE | 男性 | 21.1 | 39.1 | 23.0 | 8.8 | 3.0 | 2,108 |
| | 女性 | 18.6 | 31.0 | 21.1 | 13.0 | 4.6 | 1,572 |
| NL | 男性 | 27.0 | 47.0 | 17.1 | 4.8 | 0.4 | 1,382 |
| | 女性 | 31.5 | 37.4 | 15.3 | 6.5 | 2.6 | 1,737 |
| UK | 男性 | 35.6 | 28.8 | 13.6 | 8.6 | 5.0 | 1,342 |
| | 女性 | 40.4 | 24.1 | 12.7 | 6.9 | 5.3 | 1,963 |
| NO | 男性 | 50.1 | 31.3 | 9.9 | 3.5 | 1.2 | 1,442 |
| | 女性 | 52.9 | 28.5 | 9.2 | 1.7 | 0.6 | 2,082 |
| FI | 男性 | 41.4 | 36.7 | 11.0 | 4.5 | 1.7 | 1,046 |
| | 女性 | 42.6 | 31.1 | 9.3 | 4.3 | 1.3 | 1,615 |
| CZ | 男性 | 54.7 | 25.4 | 7.5 | 4.4 | 1.2 | 1,302 |
| | 女性 | 45.2 | 18.0 | 6.6 | 3.5 | 0.7 | 1,791 |

注：欧州対象国は、スウェーデンを除く。

設問：あなたの仕事環境を全体として考えると、あなたの仕事は、あなたの学歴にどの程度ふさわしいのですか。

そこで、大学教育と対応した仕事につかない場合の理由をみると、日本の大卒者では、「安定している」「仕事がおもしろい」のほかに、「希望する地域での勤務が可能」など仕事外的な生活条件もあげられている³⁾。これに対して、欧州では、「仕事がおもしろい」「学歴に見合った仕事が見つからない」「この仕事をする事でキャリアの展望が開ける」「高い収入がえられる」など職業キャリアに直接関連する理由が多くなっている(表1-20)。

3) 「家庭の都合にあわせられる」という理由も卒業後8~10年を経過した女性で多くなっている

表1-20 大学教育と対応しない仕事を選ぶ理由

| | | (複数回答:%) | | | | | | | | | | | | 対象者数 (無回答含む) | | | | |
|----|----|---------------------------------|---------------------------------------|--|--|---|-----------------------|---|---------------------------------------|----------------------------|--------------------------------------|---------------------------------|---|-----------------|--|--|--|-------------|
| | | か つ つ て い な い | リ ア の 展 望 が 開 ける | こ の 仕 事 を す る こ と で 、 キ ャ リ ア の 展 望 が 開 ける | 関 係 な い 仕 事 が 好 き だ | 自 分 が 勉 強 し た こ と に あ ま り 関 心 な い | 事 に な つ た | 昇 進 し て 以 前 の 職 より も 自 分 が し た 勉 強 と 関 連 が 少 な い | 高 い 収 入 が 得 ら れる | 安 定 し て い る | 仕 事 が お も し ろ い | 程 の 融 通 が き く | パ ー ト タ イ ム で 働 け たり 、 日 | | だ 希 望 す る 地 域 で の 勤 務 が 可 能 | 家 庭 の 都 合 に 合 わ せ ら れる | け ん は 自 分 が 考 え て い る キ ャ リ ア で は 最 初 に 自 分 の 勉 強 と ほ と と ん ど 関 係 な い 仕 事 に 就 か な い | そ の 他 |
| 日本 | 男性 | 10.2 | 10.6 | 7.2 | 0.5 | 6.8 | 21.0 | 20.6 | 2.7 | 17.6 | 5.6 | | | | | 4.0 | 9.5 | 1,808 |
| | 女性 | 11.5 | 8.7 | 5.2 | 0.2 | 5.2 | 19.7 | 18.3 | 5.5 | 17.9 | 6.9 | | | | | 2.7 | 9.6 | 1,613 |
| 合計 | 男性 | 10.0 | 11.3 | 3.8 | 1.9 | 7.7 | 7.4 | 12.2 | 5.6 | 8.7 | 5.2 | | | | | 5.2 | 3.8 | 15,403 |
| | 女性 | 10.4 | 7.3 | 3.3 | 1.2 | 4.8 | 6.8 | 9.3 | 6.5 | 7.7 | 5.8 | | | | | 4.3 | 4.1 | 18,607 |
| IT | 男性 | 17.5 | 10.9 | 2.3 | 0.3 | 4.2 | 8.0 | 8.8 | 7.9 | 5.9 | 5.8 | | | | | 4.2 | 3.1 | 1,453 |
| | 女性 | 20.4 | 5.9 | 1.3 | 0.3 | 2.7 | 10.4 | 6.2 | 11.1 | 4.7 | 9.3 | | | | | 2.6 | 3.0 | 1,649 |
| ES | 男性 | 9.8 | 6.0 | 0.5 | 0.5 | 2.3 | 7.0 | 6.0 | 5.0 | 5.7 | 3.6 | | | | | 4.0 | 1.4 | 1,291 |
| | 女性 | 11.5 | 4.5 | 0.7 | 0.2 | 1.8 | 5.4 | 4.9 | 4.8 | 5.1 | 3.1 | | | | | 3.4 | 1.3 | 1,730 |
| FR | 男性 | 12.5 | 12.8 | 3.3 | 1.0 | 7.2 | 7.8 | 11.6 | 2.6 | 7.2 | 3.7 | | | | | 6.9 | 4.1 | 1,653 |
| | 女性 | 13.9 | 8.9 | 3.0 | 1.7 | 4.1 | 8.2 | 9.7 | 5.0 | 8.2 | 5.4 | | | | | 5.6 | 4.8 | 1,851 |
| AT | 男性 | 5.9 | 9.6 | 3.5 | 0.7 | 6.6 | 4.9 | 11.0 | 7.0 | 7.6 | 4.7 | | | | | 4.9 | 4.2 | 1,204 |
| | 女性 | 9.5 | 6.8 | 3.4 | 0.8 | 4.4 | 6.8 | 9.7 | 10.7 | 7.8 | 7.3 | | | | | 4.6 | 5.6 | 1,102 |
| DE | 男性 | 10.7 | 12.5 | 3.3 | 1.4 | 5.9 | 8.0 | 13.9 | 8.2 | 11.1 | 5.9 | | | | | 4.8 | 5.2 | 2,108 |
| | 女性 | 12.5 | 9.5 | 3.1 | 0.5 | 3.1 | 8.5 | 11.2 | 10.4 | 12.8 | 7.3 | | | | | 4.2 | 6.9 | 1,572 |
| NL | 男性 | 6.2 | 10.1 | 2.5 | 1.1 | 5.3 | 4.7 | 12.4 | 2.2 | 3.6 | 1.4 | | | | | 1.9 | 6.4 | 1,382 |
| | 女性 | 7.7 | 6.3 | 2.7 | 0.9 | 3.0 | 5.2 | 10.6 | 5.8 | 5.2 | 3.0 | | | | | 2.2 | 8.0 | 1,737 |
| UK | 男性 | 11.9 | 14.9 | 5.8 | 1.9 | 12.7 | 7.1 | 12.7 | 4.4 | 10.2 | 3.4 | | | | | 3.7 | 4.5 | 1,342 |
| | 女性 | 11.4 | 12.4 | 5.3 | 1.4 | 9.4 | 6.8 | 11.7 | 4.6 | 9.2 | 4.2 | | | | | 3.8 | 5.0 | 1,963 |
| NO | 男性 | 6.0 | 7.1 | 1.7 | 1.1 | 4.7 | 3.1 | 6.0 | 4.0 | 6.7 | 3.1 | | | | | 3.9 | 2.6 | 1,442 |
| | 女性 | 5.2 | 4.3 | 1.2 | 0.7 | 3.0 | 2.2 | 4.1 | 3.9 | 5.1 | 4.5 | | | | | 2.1 | 2.4 | 2,082 |
| FI | 男性 | 7.9 | 8.3 | 11.9 | 1.1 | 7.2 | 8.7 | 14.5 | 7.1 | 8.6 | 4.1 | | | | | 8.8 | 2.1 | 1,046 |
| | 女性 | 7.0 | 5.0 | 10.0 | 0.7 | 3.3 | 6.2 | 10.5 | 4.3 | 7.7 | 4.9 | | | | | 7.5 | 2.2 | 1,615 |
| SE | 男性 | 9.5 | 9.4 | 2.1 | 2.9 | 9.0 | 1.9 | 12.2 | 5.3 | 6.5 | 4.3 | | | | | 1.0 | | 1,180 |
| | 女性 | 8.0 | 5.6 | 2.0 | 2.1 | 5.2 | 2.0 | 9.6 | 6.1 | 5.8 | 4.8 | | | | | 2.6 | | 1,515 |
| CZ | 男性 | 10.2 | 21.4 | 6.8 | 9.4 | 21.2 | 19.8 | 25.6 | 8.2 | 22.0 | 17.7 | | | | | 13.6 | 3.3 | 1,302 |
| | 女性 | 7.8 | 10.3 | 4.0 | 4.2 | 12.3 | 13.0 | 15.2 | 7.0 | 13.6 | 11.1 | | | | | 9.3 | 2.9 | 1,791 |

注：スウェーデンでは「その他」を設けていないため、当項目の対象者は減る

設問：現在の仕事があなただけの経験した大学教育と対応していないとお考えの方に伺います。なぜあなたはその仕事を選ばれたのですか。

6) 日本で高い、教育訓練への必要性認識と職業能力開発の選択肢としての大学院

日本では、大卒者の半数が、リフレッシュ教育などの「今後の教育訓練の必要性」を「とても感じる」と回答しているのに対して、欧州では、対応する「とても感じる」比率が男女とも3割に満たない(表1-21)。ただし、ここでも欧州内の国ごとの差異は大きく、オーストリアの高等教育修了者は男女とも7割が今後の職業教育の必要性を感じており、これは同国の大学卒業者のほとんどが専門的・管理的職業で就職していることと関連づけてみると、専門性のブラッシュアップの必要性が高く意識されているのではないかと推察される。

職業教育訓練の実態のほうをみれば、企業内外での固有の教育訓練への参加経験率は、長期プログラムについては日本2割台、欧州3割台と大きな違いはないものの、短期プログラムでは日本で

2割前後であるのに対して、欧州では5割を越えており大きな開きがある。なお、ここでは、格別に名称を付さず企業内で実施されている OJT などが卒業者のアンケート回答に含まれていない可能性があり、解釈には注意が必要であろう。

表 1-21 今後の教育訓練の必要性の認識

| | | (択一回答、%) | | | | | 対象数 (無回答 を含む) |
|----|----|------------|-----------|-------------------|-----------------|------------|---------------------|
| | | とても 感じる | やや感 じる | どちら ともい えない | あまり 感じな い | 全く感 じない | |
| 日本 | 男性 | 46.6 | 34.8 | 7.4 | 5.1 | 1.6 | 1,808 |
| | 女性 | 50.9 | 35.3 | 6.1 | 3.2 | 0.7 | 1,613 |
| 合計 | 男性 | 25.8 | 36.8 | 22.2 | 7.9 | 3.6 | 14,223 |
| | 女性 | 26.1 | 35.7 | 23.1 | 7.6 | 3.6 | 17,092 |
| IT | 男性 | 27.3 | 41.5 | 21.3 | 4.5 | 2.2 | 1,453 |
| | 女性 | 31.8 | 37.7 | 21.2 | 4.5 | 2.2 | 1,649 |
| ES | 男性 | 27.5 | 38.6 | 21.5 | 7.0 | 2.7 | 1,291 |
| | 女性 | 28.7 | 36.3 | 23.9 | 6.6 | 1.8 | 1,730 |
| FR | 男性 | 15.4 | 27.8 | 24.7 | 16.3 | 6.0 | 1,653 |
| | 女性 | 18.0 | 27.4 | 24.4 | 13.7 | 6.8 | 1,851 |
| AT | 男性 | 68.9 | 22.6 | 3.8 | 1.0 | | 1,204 |
| | 女性 | 70.5 | 20.7 | 4.3 | 1.0 | 0.1 | 1,102 |
| DE | 男性 | 24.6 | 43.0 | 21.8 | 6.3 | 2.6 | 2,108 |
| | 女性 | 23.7 | 37.8 | 24.4 | 8.9 | 3.4 | 1,572 |
| NL | 男性 | 7.4 | 31.8 | 36.6 | 14.6 | 8.0 | 1,382 |
| | 女性 | 8.3 | 31.8 | 33.6 | 14.6 | 9.8 | 1,737 |
| UK | 男性 | 23.3 | 36.0 | 20.3 | 10.4 | 5.1 | 1,342 |
| | 女性 | 22.7 | 34.1 | 24.5 | 8.1 | 6.0 | 1,963 |
| NO | 男性 | 24.8 | 42.2 | 22.8 | 6.0 | 1.9 | 1,442 |
| | 女性 | 24.9 | 43.1 | 22.7 | 5.4 | 1.3 | 2,082 |
| FI | 男性 | 20.2 | 37.8 | 23.3 | 7.1 | 4.4 | 1,046 |
| | 女性 | 25.9 | 38.1 | 19.6 | 6.6 | 2.1 | 1,615 |
| CZ | 男性 | 25.0 | 43.5 | 23.9 | 4.0 | 2.8 | 1,302 |
| | 女性 | 23.8 | 43.7 | 25.3 | 4.7 | 1.5 | 1,791 |

注：欧州対象国はスウェーデンを除く

設問 あなたは、現在さらに教育や訓練を受けて自分の能力を高めたり、リフレッシュさせる必要性をどの程度感じていらっしゃいますか。

また、日本での今後の「リフレッシュ」「ブラッシュアップ」教育・訓練の場としての「大学院」活用について、明確に「希望する」と答えている者は5%前後であるが、「関心はある」という層もふくめれば、学卒者の4割以上に達しており、生涯学習・継続教育への関心の広がり注目される(表1-22)。

表 1-22 大学院での再教育の希望

| | 日本 (%) | |
|--------------------|--------|------|
| | 男性 | 女性 |
| 希望する | 5.9 | 4.3 |
| 関心はあるが、行くかどうかわからない | 36.2 | 36.1 |
| 関心がない、行きたいと思わない | 39.7 | 49.8 |
| すでに在学した | 13.2 | 5.8 |
| 対象数(無回答を含む) | 1808 | 1613 |

設問 あなたは、今後大学院への進学を希望しますか。

5. まとめと考察

1) 日本と欧州との2つの職業への移行モデル

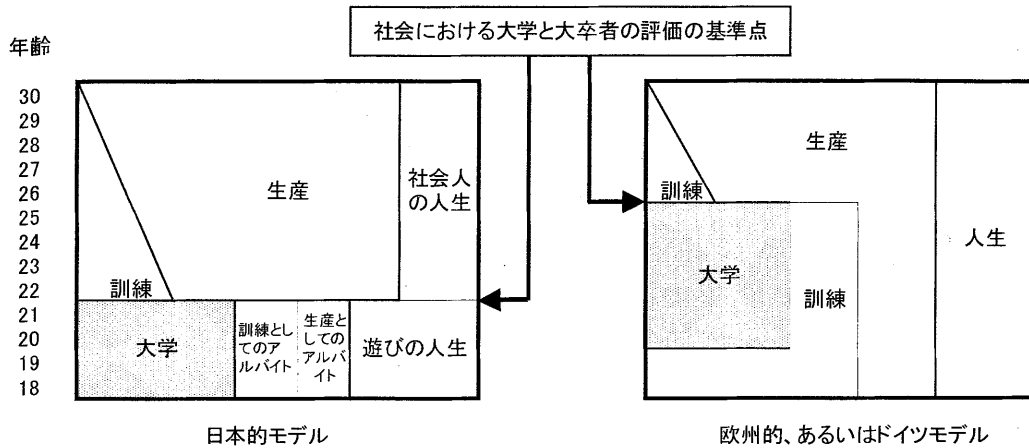
本章での知見について若干の考察を加えてみると、日本における「大学知識の無用性」「卒業者の職業的準備の不足」などと指摘される問題点は、欧州内でも比較的卒業年齢の若い高等教育修了者を輩出する制度を持つ国々と、一定の範囲で共通性を持っている。つまり、そのことは、マクロレベルでの平均的な卒業年齢が、社会全般が「大卒者」をいかに「大人」として認識するのかの指標となっていることを示すのではないだろうか。

日欧のこの点での社会モデルを対比的に図式化したものが、図1-3である。つまり、日本では、高校から大学まで<アルバイト>以外の経験をもたず大学生活をエンジョイしている青年(成年)は、<社会人>ではないのである。こうした用語があること自体、学生を異界におき、大学卒業者のもつ経験や力量を貶価している可能性があるし、またそうした認識ゆえに、企業等の諸組織は青年に責任ある自律的な立場を与えないのではなかろうか。

これに対して、欧州側でもドイツなどの比較的高い年齢で、かつ長期的な高等教育を経験する場合には、高等教育入学までの経験が高等教育での学習のための基礎的・背景的な土台となり、最終的に卒業時点では一定の人材としての確立が期待されているのではないだろうか。結局、日本の大卒者は、卒業後の年数を経て企業内でのOJT等の意図的・組織的なあるいは無意図的・無組織的な訓練を経て、欧州モデルの大卒者と同じ年齢に達することで、はじめて大学知識を活用するチャンスが生まれるのではないだろうか⁴⁾。

4) 教育を通して得た知識技術は陳腐化し、大学での知識の直接的な関連性、有効性は卒業後の年数を経て低下すると考えるのが自然のように思われる。しかし、大卒者の追跡調査(92年と98に同一対象調査)の結果は、むしろ逆であり、年齢とともに大学教育の有用性が高まっている。つまり、就業期間中を通して、大学教育で得た知識・技術が活用できる仕事により近づく形で多くの大卒者が職業経験をしている(吉本1999b)。

図1-3 日欧の大学教育と職業への移行モデル



2) インターンシップ等の職業体験をめぐるインプリケーション

本調査研究の知見は、今日の大学教育改革に対してさまざまなインプリケーションをもつものである。政策的に推進されているインターンシップも、「就職」よりも「社会への移行」の方を強調する観点が必要であり、特に「大学知識を活用する経験」を提供し、そうした知識獲得への意欲を高めたかどうかといった評価尺度を開発していく必要があるように思われる。

さらに、「アルバイト」という経験も、それが大学で学ぶ専門分野と対応していれば、より適切な「移行」への動機づけにつながるものであり再評価すべきである。つまり、欧州諸国と異なり高負担を強いられる日本の高等教育環境において、社会的な自立経験を獲得する活動として、それらの諸々の活動に対して総合的かつ適切な支援が求められるはずである。

3) 「職業生活への移行」を把握するための「追跡調査研究」の体制確立の課題

本稿でみた学卒就職のプロセスや初期キャリアの多様化は、「移行」問題の広がりである。「文部」や「労働」という行政が単独で扱っているテーマを越えているように思われるが、果たして今日の省庁再編でそうした広がりを経政策的にカバーする構想力が形成されていくのだろうか。

OECD は、2001年から、国際的な教育評価プロジェクトとして、15歳の中学生たちが中学でどのような知識・技術を獲得し、その後10年間でどう「社会へ移行」していくのかを把握する追跡調査を企画しているという。文部科学省が、矮小な「学力低下論争」に振り回され緻密な「学力調査」だけを推進するのではなく、「学校から先の移行」にどれほど文教政策的な関心を持ち、「移行の

前の教育」に対する関心を醸成できた他の省庁との連携を通して、政策的イニシアティブを発揮できるのだろうか。

また、個々の高等教育機関においても、「職業への移行」を自らの機関の教育効果として自己点検・評価していくための契機として、こうした卒業生調査の方法論の開発が求められているのではないだろうか。

【参考文献】

吉本圭一（1999a）「労働市場との関係」『高等教育研究紀要第17号：高等教育ユニバーサル化の衝撃[I]』高等教育研究所、143-156頁

吉本圭一（1999b）「職業能力形成と大学教育」、日本労働研究機構『変化する大卒者の初期キャリア』、142-166頁